

〈巻頭言〉

with コロナ、post コロナの QOL

若 狭 重 克 (QOL 研究所長 人間生活学部長)

昨年 2 月以降の新型コロナウイルス感染症の拡大は、私たちの日常生活に大きな影響をもたらした。未だその終息は見とおすことはできず、種々の対策は 2 年目を迎えている。この間、我われはオンラインツール等を活用した授業や会議等、それまでとは違う方法で仕事と向き合うことになった。そしてこの経験は、これまでの常識を大きくかえることになった。ここでの常識とは、社会や私たちの日常における価値と符合するものと考えられる。

例えば教育について、学びの場で教える者と教えられる者との対面による関係を基盤として展開されるものであるという考えは、私にとっては常識の一つであったわけである。そこでの人間関係は、直接的な触れ合いをとおして形成されるものであり、触れ合いの中で感じる人の息遣いや熱はその関係において不可欠なものとして理解してきた。そしてそこに価値を見出し、学生と向き合ってきたのである。また、多くの人にとって会議とは、会議室に赴き場の空気を感じながら参加するものであった。会議室における対面での議論が、よりよい方向や結果を生み出すのではないかと思ってきた。しかしながら、この一年以上にわたるコロナ禍における私たちの営みは、こうした常識を覆すこととなった。

オンラインツールを活用した授業や会議は、画面上で他者と向き合い、息遣いや熱を感じることはなく、場の空気を感じることも難しい。他方、容易に資料提供や情報発信ことができ、場の空気の影響を受けることも少ない。また、現地に赴く必要は無く、移動時間や混雑からは解放されることとなった。すなわち、行為や関係におけるストレスを感じる度合いは大きく軽減されることとなったのである。

クオリティ・オブ・ライフという用語は、人びとの生活の「望ましさ」、個々人の満足感、生活の快適性、生活の「豊かさ」などと関連する概念とされる。コロナ禍の中での経験から、今後はこうした概念を再考することが我われに課された課題ではないだろうか。

例えば、学生目線で考える「望ましい」学びとは何か。その学びをとおしての満足感や快適な学びの環境と学びの「豊かさ」をどのように考えるのか。とても難しい課題である。前・後期合わせて約 30 週大学に通い、通学に一定の時間を費やし、大学関連以外の時間が圧縮されている。そこで働く我われにも同様のことが言えるだろう。我われは、コロナ禍がもたらしたプラスの資源をいかに有効活用していくのかという新しいステージに立っている。他方、私が担当しているソーシャルワーク教育では、コロナ禍においても臨地での実習を終えることができた。学生たちは現地に赴き、人びとと関わりながら大きな成果を持ち帰ってきてくれた。こうした臨場感のある学びの大切さは、変わらない常識の一つである。

さて、これからをどのように考えるのか。それは、新たな常識とその価値を見出していくことと従前からのものをいかに融合していくかではないだろうか。このことについては、恐らく多くの人気が付いている。だからこそ我われは、新しい常識を組み入れた学びの場やその方法を創造していかなければならないのではないだろうか。今ここでその具体的なイメージを示すことはできないが、コロナ禍 2 年目を迎えている状況下で考えていかなければならないのであろう。それは、厳しさを増す大学の生存競争にも影響するものであろう。

